

何蒸鯉なまぐしの煮り附けか。次は飛び魚の鹽焼やナ。よし〜。あんまり良え物喰はんナ。次は何や。」
「鹿尾菜めくしと生揚げで。」

「葬禮の辨當まらやがナ全まらで……。お清、お前は何や。」

「妾めかけは蟹の二杯酢で。」

「おツ。女が一番洒落た物喰ふがナ。面白い面白い。お清が蟹の二杯酢と……。お元は何が欲しい。」
「鏡台と針差しを……。」

「オイ〜。嫁入りするのと違ふで、喰べる物や〜。」

「そんなら揚げ昆布。」

「ア又下落しよつた。よし〜。サア清吉お前これ持つてすーつと注文して廻つといで。皆裏口から持つて來とくなはれちうとかんと勝手知らん家うちがあるで。お前も何でも好きな物を云ふて持て來て貰ひや。」

甚い事になりました。

「あゝ、藤七。お前氣の毒なけど鳥渡使ひに往て來てんか。この手紙を持つてナ。曾根崎新地の『大瀧』といふ内へ行て欲しいのや。頼むで。」

「あゝ成程。それで今日は皆に御馳走が……。」

「左様や。チョツと氣轉の利いた者や無いと出來ぬ使ひやね。それでお前を頼むのや。さあ少いけど取つときや。着物も何も其儘で良えのや依てに云ふて大急ぎでナ。駕は裏の方から入れるのやで。」

「承知を致しました。往て参ります……。」

「へエ今晚は。毎度有難うはんで。」

「へ、今晚は。毎度大け……。」

「へエ、大きに遅うなりました。」

「大きに、お待つ遠はんでやす。」

「いよう來た〜。サア皆運びや。奥へお膳を出してな。それをづ〜と並べるのや。さあ運んだ〜自分の喰ふ物丈け運ぶなんて、せちべんな事せんと、御互ひにしんかいナ。さア番頭。お前は先き坐つたり。で無いと他の者がよう坐らへん。お清とお元は暫く酒の爛に廻つてや。さ、男連中は皆坐つた〜。何爛が出來てるか、よしや持つて來て。さ、番頭行こ。」

「いやア……。私は……。」

「なんで一々そない云ふのやいな。猫かぶつたかて、あけへんちウのに。さア受けんか。」

「恐れ入ります。どうぞ眞似だけ。アツ。そない。おう〜。充満いっぱんついで呉れはりましたなア。御馳走さん、頂戴いたします。……ア、美味しい。」